

令和4年2月1日発行 春燈/第77巻第2号(毎月1期1日発行) 昭和21年7月22日第3種郵便物承認

春燈

2022 February

2月号



久保田万太郎の句

春浅し空また月をそだてそめ

『流寓抄』昭和三十三年

見上げているのは三日月でしょうか。これから満月に向かうところを「空また月をそだてそめ」と言い留めています。「そだてそめ」とひらがなにしたらどこに何とも繊細な詩情が漂います。目の前の月を詠みながら、時空の流れを表現したスケールの大きな作品。「春浅し」の時候の季語が動かない。つぶやくように詠んだとても美しい十七音だと思います。

小山 繁子

久保田万太郎の句

蒲公英のにはかなる黄のわきにけり

『これやこの』昭和二十一年

「昭和十七年四月、奉天ヤマトホテルにて」の中の一句である。ホテルの近くで突然たんぼぼの黄の群生に出合った。外国で思わぬ沢山のたんぼぼに出合ったことへの感動も一人で「にはかなる黄のわきにけり」と思わず呟いたのだろう。私も中国東北の旅で、このホテルに泊ったことがある。季節は違ったが、昭和も平成も変わらぬ景であったらうと思っ。

持田 信子

安立公彦



手触れたきポインセチアの紅愛し

日向ぼこに駢るる齡を諾ふや

冬木立落日清に笑まふかに

行く年やテレビに映る流行唄

マスクして少女の愁ひ去り遣らず

燈下集

○ 河本由紀子

若き日の想ひを抱き山眠る
登校の児のほほ赤し息白し
卒寿となるも冬夕焼に母を恋ふ
冴ゆる夜や亡き人枕辺に立ちぬ
老医師に数値ほめらる冬ぬくし

○ 永井恵子

日を欲りて伸ばす小枝の紅葉せる
烏瓜数多の星に囁けり
山茶花の音なく散るや路地止り
雑炊を嫌がる夫の過去如何に
杖買ふも買はぬも無情寒に入る

○ 荒井ハルエ

青空を弾く拍手七五三
弁柄の壁の艶めく小春かな
懐にワクチン証明神の旅
ホスピスの明るき窓辺冬木の芽
寒牡丹燃えつくるまで愛説いて

○ 石橋邦子

駒込の櫻桃子忌や合掌す
雑魚売の成田参道しぐれけり
下総の風なき日なり浮寝鳥
日暮里の空の青さや十二月
一茶忌を修する寺や冬木の芽



○ 石田康明

第六波早晚来るらし師走

阿蘇小春雲居はるかに釈迦如来

今生の愛のひとつぢ日脚伸ぶ

老耄の甦るなり小春風

妻試作太根もちの熱つあつ

○ 宮崎 洋

空よりも川の夕映え冬に入る

久々の日差しに匂ふ石路の花

「かわいい」を名前と思ひ犬小春

落葉してひとりの道のはなやかに

開けず置く障子の影のたのしさよ

○ 持田信子

山茶花の散りしく朝の至福かな

日輪へ背を向け大根引きにけり

掛け外し難儀なれども大根干す

通ひ路や落葉の乾く音を踏み

書道展に子らの句並ぶ冬ぬくし

○ 平沢恵子

洗濯機の取説めくる冬はじめ

綿虫や下校の門を子らてんでん

郵便のバイクの止まる小六月

茶の花や母前掛けに指揃へ

短日や序でに夫の爪を切り

○ 中里よし子

夕月やいつより絶ゆる雁の棹

蝶病みて千草の風にまどろめり

嘘ひとつ言へず老いたり花八手

なにもせぬ一日大事の小春かな

右不明左安曇野時雨るるや

○ 木村みどり

旅したき神渡してふ風に乗る

初雪や絵本の中の赤い屋根

セーターや絵本作家の細密画

狐火や宇宙列車の停車駅

ビッグボスと呼ばせる男鴉日和

○ 大西由美子

小春風手持無沙汰な象の鼻

深窓の人の影なく蔦枯るる

白きものみなほつこりと冬野菜

青木の実夕べの路地の道標

小春日や回覧板に笑み添へて

○ 山下健治

葉牡丹の渦を啄む鳩のゐて

波郷忌や冬日拾ひて葛西橋

生き方論の書肆にあふるる十二月

寒晴や大道芸人みな若き（川崎駅頭句）

「上を向いて歩こう」の歌碑を仰ぐや冬葦

○ 池上昌子

我が庭に夢のやうなる釣船草

秋高し寂し過ぐるは閉ぢ籠り

朝寒の広場に数多自彊術

化粧して叔母の手編みの冬帽子

櫟黄葉一片手にし空仰ぐ

○ 小林紫乃

泣きさうな冬月そつと雲添ふや

湖の辺の落葉松林冬に入る

冬至粥あはずしまひの三姉妹

盛り上がる思ひ出話蜜柑むく

アメ横の威勢良き声師走かな

○ 近藤真啓

座布団に人のぬくもり冬紅葉

「敦盛の最期」へ挟む落葉かな

日向ぼこだんだん吾の遠のきぬ

冬ぬくし路地に鳴り出すオルゴール

また一步踏み出す朝冬木の芽

○ 山下朝香

師を偲ぶ紫煙のかなた石路は黄に（孝村様）

賽銭箱の音軽やかや神の留守

佳きことの続く茶の花日和かな

落葉踏んでひとりの音を染しめり

夫の忌を修する夜の時雨かな

○ 田中嘉信

多摩川の煌めく水面冬に入る
保母さんにぶら下がる児ら小春風
小春日やバドミンントンの姉いもと
冬日射すフレンチ窓に眠る猫
幸せの隣に並ぶ日向ぼこ

○ 室井津与志

御薬園藩侯偲び雪吊りす
雪吊は三十三本老ゆる松
池の面に逆さ雪吊凜として
雪吊の景を丸呑み池清か
太陽は神よインカの冬至かな

○ 佐保まさを

散りしきる山茶花白し薬医門
ケーブルカーの唸る索糸山紅葉
黄落や薄日洩れ来る曲輪跡
雪吊や荒縄匂ふ男松
石路咲くや風の奏でるオラトリオ

○ 山浦紀子

手をつなぎ冬夕焼の家路かな
暮早し背に受け止むる子の話
寢室の玻璃戸に音す木の葉かな
ゴスペルのビートに酔ひし感謝祭
白鳥の一羽隔たる白さかな

○ 中上馥子

花八手老いに七曜なかりけり
行く秋や序列の変はる姉妹
オーナーの替はる蕎麦屋や小六月
塵一つ無き境内や神の留守
古庭の窪みに溜まる木の葉かな

○ 農野憲一郎

一輪を両手に享くる寒椿
空風や檜高垣は武者の色
墓守の片手拝みや落葉焚
十念や大輪の菊立枯る
冬草の庇うてゐたる命かな

○ 山本泰人

錦秋の子ども歌郷伎の舞台かな
狐火や祖母といつしよの箱根山
密やかな村の夫婦のなめこ汁
日本橋大旦那逝き秋の天
学窓も友もけぶるや秋時雨

○ 横山さくら

実の色を見つめ触らずりんご買ふ
指先をそつと丸めて冬の朝
訪問の日にも確かめ年用意
短日や通りに響くクラクション
寄鍋の昔話も尽きにけり



余言 安立公彦

生みたて卵両手にうけて冬温し

佐藤 信子

この気持は良く分かる。子供の頃、庭隅に鳥小屋があり鶏を飼っていた。「生みたて卵」には、ほのかな温みがある。十数羽近く居たので、卵も多かった。

作者は今、知人に、「生みたて卵」を幾つか戴き、両手に受ける。白茶色の卵には、ほのかな温みが残っている。すぐに浮かぶのは、「冬温し」の季語である。さすがに練達の作者、普通には或る日の記憶として残っている語が、即座に作用する。人の句を読む心懸けの一つとしたい。

まぎれなく指の先より冬来り

三上 程子

冬の来るのを、店先の野菜や果物の品数の多少で感じるのではなく、「指の先より」とあるのが、如何にも作者らしい感性である。人の感性はその人の人間性により異なるのは、今さら書くまでもないこと。

この句を見たとき、「指の先より」に暫く立ち止まった。良く考えると、それは紛れもない事実である。その事実の

見て、自立心が幾らか高まった。

縄飛の数へる声す父と子らし

吉川 隆

縄飛びをしながら、数を数えている二人。父親と男の子。「父と子らし」の詠みの字余りに、父と子の愛情の通いが読みとれる。如何にも作者らしい表現だ。同時発表の、〈冬の月棚田に水の無かりけり〉の清澄さ、〈妻歌ふ歌は「ふるさと」落葉道〉の妻への愛情。ともに作者ならではの句である。先日、作者から手紙を貰った。「今号で退会します」とある。退会には事情があるろう。それはその人のみの事情である。残念だが止むを得ない。無事を祈るのみ。

石路咲くや真砂女に似合ふ黄八丈

溝越 教子

鈴木真砂女先生のポスターが、銀座松屋の店内に飾られたことがあった。等身大の倍はあるかという大きさ。「その時の着物が黄八丈で、とても良くお似合いで、今も懐かしく思い出されます」と、通信欄に書いてある。私も拝見したことのあるポスターだった。「黄八丈」が善い。

同時発表の句に、へ十年を託すつもりや日記買ふがある。作者の春燈誌の表紙絵は、繊細で明るく、見る人の気持を和らげる絵だ。春燈誌の歴史に、いつまでも残る表紙絵だった。これは春燈会員全ての思いだ。近く表紙絵も変わると

思いを、「指の先より」が、しかと表している。冬至も過ぎ新年も近い。冬は思索の季節である。

金婚の玻璃戸明るき冬紅葉

木村 傘休

結婚記念日は、十年目の錫婚式、三十年目の真珠婚式、五十年目の金婚式、六十年目（又は七十五年目）のダイヤモンド婚式と続く。作者は金婚式を迎えるとのこと、心よりの祝詞を申し上げます。一口に五十年と言っても、それは半世紀である。玻璃戸の明るさも冬紅葉も言い得ている。作者は来春、金婚式を祝して、句集上梓もあると聞いた。重ねての悦びだ。コロナ禍で落ち込んでいる人々にとっても嬉しい金婚式だ。「おめでとう」の一語に花が咲く。

またすこし背丈ちぢみて冬に入る

青柳 雅子

この句を見て、わが事のように感じ入った。今夏、私も骨粗鬆症による治療を受け、今も続いている。担当医師の勧めにより、「自己牽引体操」を受けている。経過は良い方向を辿っているが、背丈は確実に縮んだ。まさに「背丈ちぢみて」である。作者の場合は、加齢に伴う平均的な作用によるものと思われる。「老化」は書きたくない言葉だが、これは止むを得ない。しかし俳句の作用は広い。この句を

のこと。そして感謝の気持は変わらない。

大空の続く彼岸へ花野道

齋藤 晴夫

この「彼岸」は、彼岸会で無く、河の向う岸。また「生死の海を渡って到達する終局、悟りの世界、涅槃」と、辞書が示す通りの別世界。「大空の続く」が、その彼岸を現実化している。それはまた、作者の理想の世界でもあろう。「彼岸へ」とあるから、自らの歩む道を指す。その道はまた「花野道」である。ここに来て読者は安堵しよう。爛漫の花野には安らぎがある。中には仰ぎ見る花もあるろう。作者の投句用紙の年齢欄には、九十八歳とある。

日輪へ背を向け大根引きにけり

持田 信子

初冬の店先には、白く太く長い大根が置かれている。他の野菜と異なり、並べられた大根には、土の匂が感じられる。これ程の大きさの大根を抜くには、力が要することだろう。作者は、今その大根を引き抜こうとしているのだ。「日輪へ背を向け」には、作付けの配置が考えられる。更に、「日輪」と「大根」の言葉は、一片の詩心を呼ぶ。

句を詠む私たちも、詩心の中に居る思いだ。掘り上げられた大根の白さには、何故か懐かしさを感じられる。

当月集

安立公彦選



○ 辻 泰子

「おはよう」の声の形に息白し
暖房の電車に独り句会かな
駅力フェに男二人や冬ぬくし
朱雀門人を飲み込む師走かな
冬紅葉鳥居の赤と競ひけり

○ 佐藤まさ子

○ 坂本依詠子

雉鳩の番飛び来る寒桜

マスクして身振り手振りの会話かな

猫じやれて床にころがる毛糸玉

縁先に話す親子や木の葉髪

口ずさむジャズのリズムや冬初め

○ 高橋寛子

○ 種田利子

望郷の俘虜の眼暗き霜の夜（香月養勇展二句）

臉には母と祖国や雪しまく

日本海に向きたる骸枯葎

肩あげの頃より気丈一葉忌

散紅葉踏むや心を空にして

寒空に日毎欠けゆく朝の月

あら夕べひと雨のあり庭の菊

星空に風の涙の時雨かな

湯たんぼや老骨そつと元気づけ

立冬と知らせ下さる師の葉書

春燈の句

安立 公彦選



神奈川 望月 郁江

往診の鞆重さう帰り花

蓮根掘る風よく孕む帆引船

霜月や山の端てらす月欠くる

山の端を上る冬月雨戸閉づ

窓際に猫のまどろむ小六月

蘊蓄を傾け酌むや葉喰

鯖雲や使ひこなせる物忘れ

夫の星ひときは燃ゆる星月夜

寄り道の多き来し方落葉踏む

マスクして口は挟まず些事は見す

朴落葉からりからりと句碑の道

青空をわがものとして冬紅葉

起き抜けの水一杯の寒さかな
茹でられてかの世の色にずわい蟹

岐阜 高井 修一

京都 村上 國枝

京都 西村 洋平

文豪も潜りし門や漱石忌（田寛寺）

光芒のうねりにまかせ枯尾花

垣添ひの水仙ほつほつ薔もち

生きるだけ徒生きてゐる木の葉髪

神迎へ出雲の四辻はき清め

雪蛩浮きつ沈みつ追はれゆく

日和良き十一月の誕生日

卒寿過ぎの義姉をたづぬや冬麗

裸木に日雀来て居り二羽三羽

神社へと晴れ着囲みて七五三

賑はしき出で湯の里や神の留守

谷間の綿虫の飛ぶ駅ホーム

初霜や物干し場まで道ひとつ
一雨過ぐや落葉の匂ふ美術館

茨城 関 道子

千葉 鳥山 英子

千葉 萩原登代子